

かわたけもく あみ

# 河竹黙阿弥

さんになきちさくるわのはつがい

おおかわばたこうしんづか

## 『三人吉三 廓 初買』 (大川端庚申塚の場)

へお嬢 吉三

「月も 朧に 白魚の 篝も霞む 春の空、

つめたい風も ほろ酔に 心持好く 浮かくと、

浮か ※がらす ただいちわ ねぐら けえ かわばた  
浮れ 鳥の 只一羽 堀へ帰る 川端で、

棹の 雫か 濡手で 粟、 思ひがけなく 手に入る百両、

(お厄 払いましょう 厄落とし) ほんに今夜は 節分か、

※にし うみ ※よたか やくお  
西の海より 川の中 落ちた夜鷹は 厄落とし、

※まめだくさん いちもん せに ちが かねづつ  
豆 沢山に 一文の 銭と違つて 金包み、

こいつあ春から 縁起がいくわえ。」

注) 万延元(一八六〇)年初演。お登勢から百両奪つて大川に蹴落したお嬢のセリフ。

※朧…春霞 白魚の篝…白魚漁の篝は冬の名物 鳥…お嬢自身のたとえ 節分…旧一月十四日。新暦だと二月下旬 西の海…厄落としの海 夜鷹…路上売春婦 豆沢山で一文…豆と一文銭(約十円)を包んで路上に投げた江戸流豆まきは、厄落し兼アウトローへの施し。

出典…『三人吉三廓初買』(黙阿弥作 河竹繁俊校訂 岩波書店 一九三八年)にルビを付し、字体を改めました。

『白浪五人男』 (雪ノ下浜松屋の場)

〈弁天小僧〉

「知らざあ言つて 聞かせやしよう。」

※はま まさじ ころえもん  
 浜の真砂と 五右衛門が 歌に残せし 盗人の

たね っ しちりがはま  
 種は尽きざる 七里ヶ浜、

※しらなみ よぼたら  
 その白浪の 夜働き、

いせん ねんきつと ちごがふち  
 以前を言やあ 江之島で 年季勤めの 児ヶ淵、

ひゃくみ まきせん あて ござら ※いちもんこ  
 江戸の百味講の 時銭を 当に小皿の 一文子、

ひゃく 二ひゃく さいせん ぜに  
 百が二百と 賽銭の くすね銭せえだんくくに

あくじ かみ みや  
 悪事はのぼる 上の宮、

いわもといん まつじょう まくらさが たびかさ  
 岩本院で 講中の 枕捜しも 度重なり、

※てながこう ふた しま おいだ  
 お手長講を 札附に とうとう島を 追出され、

わかしゅ つつもたせ  
 それから若衆の 美人局、

※てらじま ※じい  
 こつやかしこの 寺島で 小耳に聞いた 祖父さんの

に ころえろ  
 似ぬ声色で 小ゆすりかたり、

なせえゆかり きくのすけ こわかしゅ  
 名さへ由縁の 弁天小僧 菊之助という 小若衆さ。」

※浜の真砂…石川五右衛門辞世の歌「石川や 浜の真砂は尽くるとも 世に盗人の 種は尽きまじ」砂は数多いことのとえ 白浪…泥棒 一文子…一文賭博 稚児ヶ淵…江の島で昔稚児が身を投げた場所。弁天は岩本院の稚児上がり。

手長…手が長いニ手癖が悪いニ泥棒 寺島…寺のある島と弁天小僧初演の十三代 目市村羽左衛門(後の五代目菊五郎)の本姓を掛けた 祖父さんの…今は菊五郎家の 屋号「音羽屋の」と言う人が多いが、初演時の羽左衛門(屋号菊屋)の台詞は「祖父 さん」(ニ名人四代目市川小團次)。今の菊五郎所縁の役者も「父つちゃん」「祖父さん」。

『白浪五人男』 (稲瀬川勢揃いの場)

日本駄右衛門

「問われて名乗るもおこがましいが、産れは遠州浜松在

十四の年から親に放れ、身の生業も白浪の

沖を越えたる夜働き、盗みはすれど非道はせず、

人に情を掛川から金谷をかけて宿々で、

義賊と噂 高札に廻る配附の盃越し、

危ねえその身の境界も最早や四十に人間の

定めは僅か五十年、

六十餘州に隠れのねえ 賊徒の首領 日本 駄右衛門。」

へ弁天小僧

「扱てその次は江の島の、岩本院の児上り、

普段着馴れし 振り袖から、鬚も島田に 由井ヶ浜、

打ち込む浪に しつぽりと 女に化けた美人局、

油断のならぬ 小娘も 小袋坂に身の破れ、

悪い浮名も 龍の口、土の牢へも二度三度、

だんく越える鳥居数、

八幡様の氏子にて 鎌倉無宿と肩書も

島に育つてその名さえ、弁天小僧 菊之助。」

※岩本院…現岩本樓。江の島の由緒ある宿坊。稚児は美少年の世話係。振袖も着た。美人局…本来男が女に他の男を誘惑させて金を強請る手口だが、弁天は女装して一人二役。土の牢…岩本院の稚児お仕置き用の土牢。今は岩風呂に改装。

河竹黙阿弥（一八一六～一八九三）は、江戸後期から明治初期にかけて活躍した歌舞伎作者です。「三人吉三」、「白浪五人男」、「鈴ヶ森」、「河内山」など、現在も盛んに上演される傑作を残しました。重要な場面での七五調の気持ちの良いセリフが有名です。

通称『白浪五人男』は、文久二（一八六二）年初演。名題『青砥稿花彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）』ですが、浜松屋と勢揃いだけ上演する時は『弁天娘女男白浪（べんてんむすめのおのしらなみ）』を使います。浜松屋の場の「音羽屋の」のセリフは、五代目菊五郎以後、菊五郎ゆかりの役者さんは五・六・七代目を指して「とつあんの」「祖父さんの」と言います。「勢揃い」は、御園座裏のカラクリ人形で、七代目幸四郎の日本駄右衛門、十五代目羽左衛門の弁天小僧の声が聴けます。

出典…『弁天小僧 鳩の平右衛門』（黙阿弥作 河竹繁俊校訂 岩波書店 一九二八年）にルビを付し、字体を改め、かな遣いを少しなおしました。

セリフは演じ手によって微妙に異なります。初演台本は現存しません。